

## <随筆・近況>

### 山西学術調査の事ども

浅井辰郎

渡辺先生は、爪先を開いて体を上下に振り、足早にのっし、のっしと歩かれる。これを見る時、私は30年近くも前、北京駅頭や太原の軍司令部における先生の姿を想い浮べずにはおられない。

時は昭和17年春、シナ事変の戦局は中支那に移って、北支では内政が真剣に取り上げられていた。「支那地理大系・自然編」を著わされた陸軍士官学校教授の渡辺先生は、共著者の東大助教授多田文男先生とともに、昭和15～16年にかけて山西省の現地日本軍を訪れた。そして日本の一流科学者で組織した資源科学諸学会連盟から山西学術調査研究団を派遣したい、派遣してほしいという交渉を勝ち取って来られた。当時の大東亜戦争は向う所敵なく、焦点であったシンガポールに向っては、攻撃の布陣が着々と狭められていたころであったから、30余名の各科学界を網羅した団員達は意気軒昂、学術報国の念に燃えて、4月から約3カ月にわたる調査旅行を山西各地に能く逐行したのであった。地理学関係では前記の他に、陸軍士官学校教授であった故吉村信吉、新井浩、東京高師の花井重次、東大の木内信蔵、北支開発会社の和田憲夫の各氏と建国大学から参加した私とであった。私は五台山の2870m地点で、1カ月の高層気象観測に日夜挺身した。

この時期における渡辺先生は、今に勝るとも劣らぬ、「口も八丁、手も八丁」の士であり、このおかげで調査旅行も実現し、充実したのであった。特に私が「ギヤー」の別名を教えられて感にたえなかったのは、この3月の準備会に青山霞町の一喫茶店で全員の談論を一手に、いや一舌に引き受けられていた光景であった。山西省の表話、裏話から、地政学のハウスホーフアー、小牧実繁先生まで手玉に取られた観があった。しかしその論理には一つ一つ首肯されるものがある一方、団の編成や人事については私の想い及ばぬ細心が話の節々からくみとられ、ともども驚歎して措く能わざるものがあった。

さて話は最近のことに移る。昨夏、大学の同期生である明大教授岡山俊雄先生は、渡辺先生のよどみない執筆状況を「蚕が糸を吐くごとし」と形容され、その知識の該博さを「一人で地誌を書き得る、日本で最後の人物」と評価された。一方、先生の思想は、察するに、ご自身に発する天才、独創、邁進、生命力主義であり、衆を頼んでやっと自己の生存を主張する類いの悪平等、模倣、日和見、物理力主義に対してはいささかの容赦もされない方のように私はお見受けする。もし、そうであるなら先生の思想は、人類が永遠に発展するために必須な根本思想である。

どうかご退官のあとは一切の雑用を遠ざけて、あらゆる世の財宝以上に貴重なこの人生観、世界観に

統一された、ニュークな、躍動、潤歩する「地誌」を続々と編まれて、混沌たる地理学界に道標を照し出していただき、以って日本、アジア、世界のすぐれた人間の相互認識、信頼、向上に資していただきたいと私は愚意を提する次第である。ここにご退官をお祝いすると共に、ご長寿、ご研鑽を切に祈つて己まない。

## 変りゆく地理教室

浅海重夫

渡辺教授の停年退官をむかえたこの年、お茶大地理学教室は昭和24年の新制大学発足以来満21年を数え、その間18回の卒業生を世に送り出した。

先代の教室主任の飯本先生が、昭和33年に日大に移られてからすでに12年を経ている。飯本時代を地理教室の第1期とすれば、その時代の学生諸姉の大部分は、いまや息子や娘の進学の心配などしている大昔の卒業生で、現在の教室からみればそれらの人達は古生代の化石のようなものである。もっとも、それ以前に飯本先生の薫陶をうけた女高師時代の大先輩もおられるが、そのようなブレカンのおばさまたちのことは私には全くわからない。昭和28年3月の第1回卒業生の追出しコンパのさい、その直前に着任していた私の歓迎会をコミにしてもらった憶えがあるから、私はともかく18回分の全卒業生諸姉を一応知っている。

飯本主任から渡辺主任に引きつがれた前後に、教室の他の教官にも大幅な異動があり、能・赤木先生に代って式・吉田先生の登場となった。この時代は地理教室の第2期(中生代)といえる。そして昭和41年の大学院修士課程発足以後はいわば第3期(新生代)で、それまでの2講座半が3講座に拡充され、浅井・正井両先生を加え、他大学にもあまり類を見ない多分野の専門スタッフを擁する地理教室となって現在に及んだ。

第1期以来今日まで、教授側の指導体制や研究教育の方法、学生諸姉の勉学・お遊びその他全般的な学生気質は、さまざまな点で大きく変ってきたことに気づくが、大げさにいえば常に新しく変る時代の思潮と技術革新の影響が、われわれの教室にも如実に現われたとみることができる。それらの変ぼうの一端を示してみよう。

まず学生気質。講義室や集会室に放課後や休日にも入りびたって、おかしをたべながらおしゃべりをし、時に研究室の様子がえがあればすすんで無報酬の奉仕をするといった風習は、古生代の末期までに絶えてしまったように思う。巡検の宿で先生にいたずらをして喜ぶのも中生代の初期まで、その頃はほかにひまつぶしのたねがなかったのかも知れない。他大学の学生との交流がさかんになるにつれて、教